

【論文】

現代青年が葬式に見出す肯定的意味に関する研究

大坊 沙理菜 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会科学部)

I はじめに

葬式は故人を弔う儀式であるが、家族成員を失った家族にとっては多様な意味が見出される。また、葬式は仏教の考え方に基づいた儀式ではあるが、葬式に参列する全員が仏教の信仰を意識しているわけではない。一方、日本人は宗教に対する明確な意識がないとしても、宗教を基にした捉え方や行動を無意識に行っていることから、広義の宗教性を有していることも指摘されている。しかし、日本人が葬式という儀式を宗教に結びつけて、あるいは宗教には関連付けないとしても、実際にどのような意味を見出しているのかは明確ではなく、さらに、現代の若者に至っては検討されていない。

そこで、本研究では、現代青年を対象に質問紙調査を行い、葬式という儀式にどのような意味を見出すかについて、肯定的な側面に着目し検討する。

II 問題と目的

(1) 葬式について

仏教の思想にあるように、人間には避けられない苦として、愛別離苦がある。すなわち、愛する人と別れる苦しみである。例えば、大切な人との死別はほとんどの人が避けられず、それに伴う悲嘆も大半の人が経験するだろう。実際に大切な人と死別した場合には、多くの人が葬式を行う。しかし、現代日本においては、葬式の小規模化や、死を社会的に知らしめるという役割の希薄化などが進んでいることから、葬式の形骸化が指摘されている(高嶋, 2014)。また日本人は、キリスト教やイスラム教のような制度宗教とは異なる見えない宗教、すなわち、当人がそれを宗教だとは通常意識しないような宗教的なものを信じる傾向があるとされている(金児, 1997)。このような傾向も、葬式への関心が低いことを示していると考えられる。

一方で葬式は、故人を偲び供養するために行われたり(村上, 2018)、生者の側からみた死者への関係や距離のとらえ直し作業として行われたりすることから(堀, 2014)、残された人々の心の混乱を治める役割を果たすことが示されている(加藤, 2017)。また、大切な人が亡くなってから弔い上げまでの期間は、不安定な霊魂を落ち着かせる意味だけでなく、残された人々が死を受け入れていくプロセスでもあることが示されている(鈴木, 2018)。加えて、喪失経験に伴う心の問題を解決に向かわせるために、故人との絆を結びなおし、継続することが大切だとされている(Klass, Silverman & Nickman, 1996)。したがって、残された人々にとって、死者との距離の捉え直しがなされる葬式は、心理的に重要な役割を果たし得ることが考えられる。このように、葬式は、形骸化が指摘されている一方で、

日本人にとって重要な役割を果たす可能性を持つことが考えられる。

(2) 日本人の宗教性について

日本における葬式の役割を成り立たせているものとして、日本人の宗教性が挙げられる。日本では、「宗教を信じる」人は多くはないが、「宗教的な心は大切」という人が多いということが特徴とされている（林・林, 1995）。日本人の宗教性としては、宗教を信じて深く関わるよりも、「たしなむ」程度がよいとする消極的肯定論が示されている（金児, 1997）。加えて、消極的肯定論を持ちながらも、重要な局面で合格祈願をしたり占いを信じたりするなどの非合理的な行動をとることが、広義の宗教性として示されている。この広義の宗教性は誰もが持っているものとされており（大村, 2017）、実際に、宗教を「信じている」という人が25%程度であるにも関わらず、「盆や彼岸などにお墓参りをする」や「正月に初詣でに行く」とする人はいずれも70%を上回っていることが示されている（読売新聞, 2008）。また、信仰があると回答する人が30%程度であるのに対し、神仏がある、またはあるような気がする人と回答する人が65%にのぼるとも示されている（真鍋, 2009）。したがって日本人は、宗教を信仰しているという意識はあまりないが、宗教に関わる場面は多く、特に重要な局面においては宗教を大切にすることを予想される。

(3) 儀式について

家族療法の面接では「儀式」の処方が技法の一つとして挙げられる。この「儀式」とは、日常とは一線を画したところで家族に処方する一連の行為であり、儀式の処方を行う上での利点としては、以下の4つが挙げられている（福田, 1987）。一つ目は、家族員の誰をも責めない形を取れること、二つ目は、機能不全のパターンに新しい意味を与えることができること、三つ目は、その上で必要な変革を家族に引き起こすことができること、四つ目は、問題となっているパターンを指摘することなく、間接的に表現できることである。このような儀式の遂行によって家族内の暗黙のルールが変化し、問題の解決が促進されると考えられる。千葉・奥野（2017）が報告した事例では、うつから回復した娘が実家を離れる際に、父親が母親に手伝ってもらいながら料理を作り、晩餐を行うことを儀式として依頼し、家族内暗黙のルールの変化に繋がったことが示されている。

また、心理療法として儀式を処方した際に書かれた論文では、“ritual”という単語が用いられ（Parazzoli et al., 1977）、家族療法の面接場面で用いられる「儀式」の処方と一般的な意味で用いられる儀式との深い関連を見出すことができる。例えば、一般的な儀式の定義にも問題解決のための行動が含まれる場合があり、援助の方法として重要な役割を果たすことが示されている（Boss, 2015）。したがって、「儀式」の処方は変化や問題の解決を促す機能を持ち、宗教的儀式の一つである葬式も同様に、家族員の喪失に伴う問題の解決を促進する機能を果たすことが予想される。

以上より、死に伴って生じる問題から日常へと適応していくためには、故人との絆の結び直しという視点が重要であり、葬式によって故人との絆を結び直すことで、残された人々の心のケアが為される可能性が示唆されてきた。また葬式は、家族療法の面接場面にお

る「儀式」の処方と同様に家族内暗黙のルールの変更に繋がる機能を持つことが示唆されてきた。加えて、日本において葬式が重要な意味を果たす背景には、日本人が持つ広義の宗教性が存在している。つまり、日本人は広義の宗教性を持つことから、死という重要な局面において葬式を執り行うことが、宗教に対して消極的な日本人にとっても重要である可能性が示されてきたのである。しかし、葬式が必要だと感じている人々が、実際に葬式にいかなる意味付けを行っているかについての実証的な検討は見当たらない。そこで本研究では青年を対象に質問紙調査を行い、葬式の有無をどのように捉え、どのような意味を見出しているのかについて検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象者

大学生 118 名（有効回答数 113 名（男性 52 名，女性 61 名）， $M=18.99$, $SD=1.09$ ）。

なお、大学生を対象とした理由は、青年はその時代の世相を敏感に反映する存在であり、世の風潮をつくることが示されているためである（金児，1997）。また、喪失経験や儀式を執り行う機会が今後増える立場にある青年の意識に着目することで、日本における儀式のあり方を将来的な視点を持って検討することが可能になると考えられる。

2. 調査時期

2018 年 10 月。

3. 手続き

授業時間に質問紙についての説明を行い了承を得た上で配布し、回答を求めた。

4. 質問紙の構成

- (1) 亡くなってしまった大切な人の葬式をどのように考えるかについて、「必要でない」から「必要」までの 5 件法によって尋ねた。
- (2) 上記の回答の理由を自由記述で求めた。

5. 分析

- (1)の回答で、葬式が「必要」または「どちらかといえば必要」と答えた対象者について、
- (2)の回答を KJ 法によって分類した。

III 結果

- (1) 「必要」が 70.8%、「どちらかといえば必要」が 23.0%、「どちらともいえない」が 4.4%、「どちらかといえば必要でない」が 1.8%であった。
- (2) 肯定的に回答した 94 名（男性 43 名，女性 51 名， $M=18.98$, $SD=1.06$ ）についての KJ 法による分析結果を表 1 に示す。
なお、文中では大カテゴリーを《 》、カテゴリーを〈 〉、内容を【 】で示す。

表 1. 葬式の意味についてのカテゴリー分類

| 大カテゴリー | カテゴリー | 内容 | 数 |
|--------------|---------------|--|----|
| ルール変更の 起点 | 区切り | 区切りをつける(11)／けじめをつける(3)／ふんぎりを つける(1) | 33 |
| | お別れ | お別れする(5)／お別れの場(4)／お別れを言う(3) | |
| | 日常への適応 | 気持ちの切り替え(2)／新たな生活へ(1)／乗り越える(1) | |
| | 生死の境目 | 生と死に境目をつける(1)／区切りをつけてあげる(1) | |
| 死への洞察 | あの世への連絡 | 送る(9)／供養(3)／天国に行く(2)／成仏(2) | 30 |
| | 死との対面 | 死の確認(6)／死を受け入れる(5)／喪失に向き合う(1) | |
| | 死の再解釈 | 死を身近に捉える(1)／人の死について考える(1) | |
| 感情の整理 | 折り合い | 気持ちの整理(14)／気持ちの折り合いをつける(1) | 29 |
| | 弔い | 弔う(5)／追悼する(2)／悲しみを共有する(1) | |
| | 感情的混乱を治 める | 精神の安定(2)／悲しみをはきだす(1)／なぐさみ(1) | |
| | 執着 | 最後までそばにいたい(1)／その人への気持ちを残してお く(1) | |
| 儀式の再確認 | 儀式への精神 | 当たり前(7)／しっかりとした儀式を挙げたい(6)／重要 な文化(3) | 26 |
| | やらない権利 | 故人や遺族の意志の尊重(4)／やってもやらなくてもいい (1) | |
| | 慣習 | 慣習的に(3)／社会的に根付いている(1)／なんとなく(1) | |
| 故人の主役化 | 追憶 | 偲ぶ(5)／故人について考える(2)／振り返る(2) | 25 |
| | 故人の尊重 | 場を設けてあげる(3)／敬意(3)／雑に扱われたという悪 評が故人に付かないように(1)／やらないと申し訳ない (1)／多くの人に悼んでもらう(1) | |
| | 感謝 | 感謝の気持ちを表す(5)／感謝を伝える(1)／感謝を形に する(1) | |

IV 考察

葬式の必要性については、大切な人をなくした際の葬式の存在について、90%以上が肯定的な認識を持っていたことから、現代青年にとって葬式の必要性が見出されていることが示されたといえる。この結果により、先行研究において示唆されているような、墓参りや仏壇参りなどの宗教的行動を重視する日本人の傾向を、現代青年も同じく持っていることが示されたといえる。

また、KJ法による分析結果より、現代青年が葬式に対して肯定的な認識を持っている背景としては、《ルール変更の起点》《死への洞察》《感情の整理》《儀式の再確認》《故人の主役化》という5つの理由に分類された。

(1) 葬式におけるルール変更の起点について

葬式には《ルール変更の起点》となるという意味が見出されている。《ルール変更の起点》は、葬式によって故人の生前と死後との境界が意識されることを示している。カテゴリーごとに見ていくと、〈区切り〉では、亡くなった人が生きていた頃の生活や気持ちについて、残された人々がけじめをつけるという意識が表されている。なお、【区切りをつける】や【けじめをつける】という記述は、Freud (1917) による脱カセクシスが関連すると考えられる。これは、対象への情愛のエネルギーを撤収することであり、モーニングワークの目標とされる(山本, 2014)。この脱カセクシスという視点に、Klassら(1996)による絆の結びなおしという視点を加えるならば、葬式によって生きていた頃の大切な人への愛情には区切りをつけ、死者としての関わり方に変容することが可能になると考えられる。次に、脱カセクシスにも関連するカテゴリーとして〈お別れ〉では、亡くなった大切な人に別れを告げ、執着を断つという意識が表されている。これも先述のカテゴリーと関連し、これまでの関係に区切りをつけるために、お別れを言ったりお別れの間を用意したりする必要があることが考えられる。次に〈日常への適応〉では、大切な人が亡くなった後の新しい生活を、残された人々が営んでいくという意識が表されている。喪失に伴う悲嘆から日常へと適応していくためには長期的な視点が重要であるが、葬式が適応への一つのきっかけになり得ることが考えられる。そして〈生死の境目〉では、亡くなった大切な人の立場から見た生と死について、残された人々がけじめをつけてあげるという意識が表されている。先述したように、葬式などの死に伴う儀式において、残された人々が不安定な靈魂に対し、亡くなったことに気付いてもらおうと働きかけることも重要であることが示唆されている(鈴木, 2018)。

ところで、家族をひとつのシステムと捉える視点があり、そこでは、家族システムの安定状態と適応過程について着目されている。安定状態とは、外部の環境システムの変化に対応して許容範囲内で常に揺れている変動過程のことを示し、そして、システム内外の変化に対応してこの安定状態を保とうとする過程を適応過程という(遊佐, 1984)。システム内外の変化には、必然的に起きると予期される発達的变化と、予期することが困難な偶発的变化とがあるが、どちらも安定状態に危機を及ぼす可能性が大きい。死という変化に置き換えると、年齢によるような予期できる死であっても、あるいは事故のような突然の死であっても、周囲の人々の安定状態には危機が及ぶ可能性が大きいと考えられる。したがって、そのような死別という変化に対応して家族や周囲の人々の関係性が揺らぐことになるだろう。しかし、そこで葬式が執り行われれば、様々な側面で区切りが意識されるため、家族成員や周囲の人々の役割が円滑に変化あるいは維持されて、安定状態を得やすくなると考えられるのである。このように、家族システムにおける安定状態と適応過程の観点から考えると、葬式が家族システムの適応過程を促進し、安定状態に向かわせるきっかけになり得ることが考えられる。

以上より、葬式によって新しい生活が始まるといった生活面や、気持ちを切り替えるといった心理的側面、そして亡くなった人の霊魂といった宗教的側面など様々な側面において、生前と死後との境界が意識されるといえる。葬式により先述のような意識が現れるということはすなわち、葬式が、故人を取り巻く周囲の人々のルールが変化するためのきっかけになる可能性を示しているといえる。

(2) 葬式における死への洞察について

葬式は、死を洞察するというきっかけになる。《死への洞察》では、葬式によって故人の死や一般的な死という概念に向き合うことができることが示されている。カテゴリーごとに見ていくと、〈あの世への連絡〉では、故人がこの世から別の世に行くための役割を葬式が果たしているという意識が表れている。《ルール変更の起点》の中にある〈お別れ〉と〈あの世への連絡〉とは類似しているように捉えられ得るが、前者は、故人に対する残された人々の振舞いや意識が重視される。一方で後者は、あの世に送られる主語が故人であることから、故人のために残された人々ができることを手伝う、といった印象を受ける。したがって、〈あの世への連絡〉では、故人の気持ちをより重視しているという点で異なるといえる。加えて、【供養】や【天国に行くため】という記述は、葬式が、死という概念を終結としてだけでなく新しい人生の始まりとして再解釈する機会になることを示している。次に〈死との対面〉では、故人の死を確かめ、向き合ったり受容したりするという意識が表されている。加えて、死と対面することが死とは何かを考えることに繋がり、死の概念と向き合う機会が与えられることも考えられる。そして〈死の再解釈〉では、〈あの世への連絡〉や〈死との対面〉と比べて、より死という概念が一般化された形で用いられており、葬式が、大切な人の死を目の前にして死について考え直したり確認したりする機会になることが表されている。したがって記述は少なかつたものの、〈死の再解釈〉は、葬式を〈あの世への連絡〉や〈死との対面〉の機会として考えている人々が結果としてとり着く、または自然に共存する重要な意識であると捉えられる。

以上より《死への洞察》は、回答者にとって大切な人の死のみならず、さらに視野を広げた一般的な死について洞察する機会を葬式が担っていることを示していると推察される。

(3) 葬式における感情の整理について

葬式には感情を整理するという意味が見出された。《感情の整理》では、葬式によって、不安定になっている気持ちと向き合うことができることが示されている。カテゴリーごとに見ていくと、〈折り合い〉では、大切な人に対する肯定的、否定的気持ちや諦めきれない気持ちなどを整理する機会を、葬式によって得られることが表れている。次に〈弔い〉では、大切な人の死を嘆き悲しみ、かつその感情を分かち合う場を葬式が提供し得ることが表れている。大下（2009）が、感情を表現し共有する場が、残された人々の癒しに繋がることを示していることから、葬式という場が、葬式に参加した人々にとって共通の存在である故人について語り合い、感情も分かち合うことができる場となり、癒しに繋がるのが考えられるのである。次に〈感情的混乱を治める〉では、溢れる感情を吐き出すことでその混乱を緩和したり、葬式をしないことによって精神的に不安定になることを回避

したりする、という目的により葬式を執り行う意識が表れている。同じ大カテゴリーの中にある<弔い>と<感情的混乱を治める>とは類似していると捉えられるが、前者は、大切な人の死のために残された人々が共に悲しみを味わうという印象が強い。一方で後者は、残された人々の感情が大きく揺らぐことが前提にあり、それを緩和するために、悲しみを吐き出したり葬式を行うという選択をしたりすることが示されている。したがって、<感情的混乱を治める>は、残された人々のために感情の混乱を治める、という目的がより意識化されている点で特徴付けられているといえる。そして<執着>では、【最後までそばにいたい】や【その人への気持ちを残しておく】といったように、変わらない絆をいつまでも維持していきたいという希望を、葬式が叶え得ることが示されている。つまり、身体的に生きてはいない故人を、生きていたかのようにそばに感じ、気持ちを維持するためには、執着の対象である遺骨やご遺体と対面することができる葬式が重要な役割を果たすと考えられる。<執着>については、悲嘆アセスメントの際に、故人の遺品を長い間動かさない、片づけられないという問題が未解決の悲嘆をさぐる手がかりになる場合があることが示されている（山本，2014）。つまり、故人が大切にしていたものや故人を象徴するものに執着することが、死別に伴う問題の解決を妨げる可能性が示されているのである。だからこそ、故人を象徴する遺骨やご遺体としっかり向き合い、故人をそばに感じられる時間を確保することができる葬式の存在が重要であり、その後の日常への適応に繋がると考えられる。

ここで、悲嘆のプロセスという観点から考えてみると、葬式が持つ感情の整理の役割が重要であることが見出せる。Deeken（2011）は、死の悲しみを癒す過程である悲嘆のプロセスについて次の12段階を示した。すなわち、精神的打撃と麻痺状態、否認、パニック、怒りと不当感、敵意とルサンチマン（恨み）、罪意識、空想形成・幻想、孤独感と抑うつ、精神的混乱とアパシー（無関心）、あきらめ—受容、新しい希望—ユーモアと笑いの再発見、立ち直りの段階—新しいアイデンティティの誕生である。特に精神的打撃と麻痺状態の段階では、現実感覚を失う状態になる可能性が示されている。また怒りと不当感の段階では、不当な苦しみを負わされたという激しい怒りが沸き起こり、その感情が様々な対象へと向けられる可能性が示されている。このような心理的混乱を整理する機会になり得る葬式は、死の受容という段階まで含めた長期的な視点で見ても、残された人々の日常への適応に繋がる重要な儀式であることが考えられる。加えて、曖昧な喪失に伴う心理的混乱についても葬式が重要な役割を果たすことが考えられる。ここで取り上げる曖昧な喪失としては、天災などにより死亡や生存の証拠がない場合が挙げられる。この場合には、悲嘆に向き合ったり喪失に対処したりすることが妨げられ、葛藤を引き起こす可能性があることが示されている（Boss，2015）。したがって、葬式を執り行うこと自体が、大切な人が亡くなったことを示す一種の証拠にもなり、自分の感情と十分に向き合う機会が得られるという点で重要であることが考えられる。

以上より、葬式において感情を共有したり吐き出したりし、また故人をそばに感じたいという思いを叶えることで、故人に対する気持ちに折り合いをつけたり、大切な人の死に伴う心理的混乱を整理したりすることが可能となることが考えられる。

(4) 葬式における儀式の再確認について

葬式を行いながら儀式について再確認するという意味がある。《儀式の再確認》では、葬式自体が儀式の在り方に対する青年の認識を表すことが示されている。カテゴリーごとに見ていくと、〈儀式への精神〉では、葬式を執り行うことは残された人々にとって当然やるべき事であり、故人のために儀式として全うしたいと思う日本の文化を、現代青年が認識していることが示されている。一方、〈やらない権利〉では、必ずしも葬式を執り行わなければいけないのではなく、故人や残された人々が葬式の必要性をどのように感じているのかに寄り添い、葬式を行わない選択も尊重するべきだ、という意識も表われている。そして、〈慣習〉では、葬式を行うことが社会的慣習とされているため、人が亡くなった際には自然と葬式を行う流れが一般的である、という意識が表われている。また、社会的に葬式を行わないという選択が困難であるため、葬式を行うという意識であるとも捉えられる。先述の〈やらない権利〉と〈慣習〉からは、現代青年が葬式の必要性を感じていることが捉えられ難い。しかし、前者において【故人や遺族の意志の尊重】が必要だということが示されたことから、故人や残された人々の立場に立って葬式を行う意味を考え直しているという点で、現代青年が儀式について再確認していることが考えられる。また、後者において葬式が【社会的に根付いている】という意識が示されたことから、故人や残された人々の社会的アイデンティティを守るためにも、葬式を行うという選択が必要だという思いが背景にあると考えられる。これに関連して、年忌などの供養では、そこに参加する親族各々が自己を実存的に位置づけることを可能にすることが示されている（森岡, 1987）。つまり、葬式という社会的儀式を行うことにより、故人と社会との繋がりを見ると同時に、残された人々が社会との繋がりを見出すことも可能にし、自己の社会的位置づけを確認することができると考えられる。

以上より、葬式の必要性について、行うことが普通だからといった単純な考え方に限らず、社会的慣習や関係者の意志など、必要性の根拠まで視野に入れ、葬式を捉えようとする現代青年の姿勢が示された。また、葬式の必要性について、【なんとなく】といった記述からは、宗教を信仰している意識があまりないことがうかがえるが、それと同時に、故人のために【しっかりとした儀式を挙げたい】という記述も見られた。したがって、現代青年が、宗教を信仰している意識がない一方で儀式を遂行することに深く関わっていることが示されたことから、現代青年が広義の宗教性を有することが推察できる。

(5) 葬式における故人の主役化について

葬式では故人を主役化するといった意味が見出された。《故人の主役化》では、葬式により、遺族が故人を尊重する姿勢を表現できることが示された。カテゴリーごとに見ていくと、〈追憶〉では、故人の生前を思い、懐かしむ機会を葬式によって得られることが表れている。鈴木（2018）は、故人が亡くなってから弔い上げまでの靈魂不安定期こそ、故人と親しい人々が儀礼を通じて靈魂の安定を図り、死者の記憶を新たにすることが指摘していることから、葬式によって死者の記憶を確認し、かつ新たに構成していくことが残された人々にとって重要であることが考えられる。加えて、慰霊とは記憶と忘却という両義的な儀礼であることも示している（大村, 2016）。つまり、葬式では故人との思い出

や故人の人物像を記憶することと、適切に忘却することがどちらも重要であり、そしてどちらも行われることによって日常への適応が促進されていくことが考えられる。したがって、＜追憶＞で示された【偲ぶ】や【振り返る】という行為は、故人の記憶を確認すると同時に、それを適切に忘却して再構成することで、日常への適応に繋がるものであることが考えられる。次に＜故人の尊重＞では、故人を尊重する気持ちを背景に、【場を設けてあげる】ことへの希望や【やらないと申し訳ない】という考えが生まれていることが表われている。これに関連して、やり残しの仕事を果たすことが緩和ケアにおいて重要であることが強調されている（Ross, 1997）。やり残しの仕事とは、その人の人生において気がかりなまま残されている課題のことである。そしてその課題を実現できるようアレンジすることが緩和ケアの場面で主張されるケアの形の一つである。もし気がかりが解消されないと、故人も残された人々も大きな悔やみが残るということが示されている（山本, 2014）。これにより、死別後においても同様に、故人が生前に望んでいたもの、いわゆる「やり残し」していることを葬式場で実行することが、残された人々の心のケアに繋がると考えられる。その理由の一つは、故人がやりたかった望みを叶えてあげたいという残された人々の思いが満たされることが期待されるためである。したがって、葬式の必要性の理由として＜故人の尊重＞が示された背景には、故人を尊重する気持ちに沿って行動することで、残された人々の心のケアに繋がるという可能性も存在していると考えられる。そして＜感謝＞では、故人に対する感謝の気持ちを表現する場として葬式が必要だという意識が示されている。このカテゴリーにおいて、【感謝を伝える】ということだけでなく、【気持ちを表す】や【形にする】という表現も用いられた。つまり、葬式において故人と繋がり、感謝の気持ちを伝えることができるだけでなく、葬式を執り行うという行為それ自体によって残された人々が感謝していることを表現することができると考えられる。奥野（2019）は、身体に働きかける行動を集団で遂行することによって、超越的なものとの繋がりが感じられる可能性があるとして述べている。したがって、死者という超越的な存在に対して感謝を伝えるために、お経をあげたり祈ったりする機会が与えられる葬式は、重要な役割を果たすことが考えられる。

以上より、葬式によって故人を主役化することが可能となり、故人がやり残したことを儀式という場を通して叶えたり、故人のために残された人々が行動を起こすことで、残された人々の心も満たされたりすることが考えられる。加えて、葬式が故人への感謝の気持ちを身体的行為を用いて表現する場となり、残された人々が故人との繋がりを感じられる可能性が示されたといえる。

V 総合考察

本研究の結果により、現代青年にとって葬式の必要性が認識されており、葬式に対する多様な意味も見出されていることが示された。多様な意味としては、葬式によってこれまでのルールの変更がなされること、故人との別れと向き合うことを通して死について洞察すること、喪失に伴って揺らぐ感情を整理すること、儀式に対する考え方を確認すること、故人を主役化することで故人の気持ちも残された人々の気持ちも満たすこと、が挙げられる。以上のような葬式に対する意味づけにより、葬式がこれからの日本を担う青年にとつ

でも、心理的に重要な役割を果たし得ることが示された。加えて葬式が、宗教に対して消極的肯定論を持つとされる現代青年の宗教性を映し出す機能もあるといえる。これは、大切な人をなくしたとき、実際に儀式と関わることを通して、葬式の重要性を実感しているという自分の儀式への姿勢を確認することを可能にする。そして、残された人々の中でその姿勢を共有することができることを示しているとも考えられる。

以上より、本研究により示された現代青年が葬式に見出す意味を踏まえると、喪失経験をした人々が日常へ適応していくことを目指すとき、形骸化が指摘されている宗教的儀式が心理的に重要な意味を果たし得るという視点を持つことが必要であろう。加えて、儀式を行うことで残された人々の姿勢がそこに反映され、互いに儀式への意識を確認することができるため、故人と残された人々にとってよりよい儀式の選択に繋がることも考えられる。

本研究は葬式という儀式のみに焦点を当てた検討であり、葬式前後のあらゆる段階の関わりや儀式については検討を行っていないため、そこに本研究の限界がある。葬式を行うためには、大切な人が亡くなってから、または亡くなる可能性が生じてからの準備段階が必要である。準備段階では、お世話になっている寺、僧侶との話し合いや、親族間での意見交換などの機会があるだろう。したがって、この段階においても家族内ルールの変更や故人との別れと向き合うことなどがなされていると考えられる。また、葬式の後に続いていく年忌法要においても、家族の様子を故人に伝えたり、故人への感情が思い起こされたりするだろう。したがって年忌法要も、葬式と同様に生死の境目に行われる儀式としての重要な心理的意味があると考えられる。加えて、大切な人の死に伴う家族システムの変化を捉えるためには、そこに関わる儀式のシステムを考える必要がある。つまり、葬式を執り行うためには、残された人々、故人、宗教者という三者の存在が必要であるため、その三者の関係性が、残された人々の日常への適応に与える影響も考慮する必要があるだろう。

以上を踏まえ、今後は葬式に限らず、そこに関わる準備や年忌法要という段階も儀式の一部として視野に入れ、さらに儀式に関わる三者の関係性に着目し、残された人々が故人を含めてどのように日常へと適応していくのかについて検討する必要があるだろう。

【引用文献】

- Boss, P. (2006). *Loss, Trauma, and Resilience : Therapeutic Work with Ambiguous Loss*. N Y : W W Norton & Co Inc. (中島聡美・石井千賀子監訳(2015). あいまいな喪失とトラウマからの回復—家族とコミュニティのレジリエンス— 誠信書房)
- 千葉崇弘・奥野雅子(2017). 両親サブシステムへの介入により娘の自立を支援した事例 日本家族心理学会第 34 回大会発表論文集, 42-43.
- デーケン・アルフォンス(2011). 死とどう向き合うか NHK出版
- Freud,S. (1917). Mourning and Melancholia. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, XIV: On the History of the Psycho-Analytic Movement, Papers on Metapsychology and Other Works*. The Hogarth Press, pp.237-258.
- 福田俊一(1987). 家族療法と儀式 親と家族心理学 家族心理学年報 5 金児書房

- pp.149-174.
- 林知己夫・林文(1995). 国民性の国際比較 統計数理, 43(1), 27-80.
- 堀剛(2014). 葬送のイメージ論—いやしと宗教性— 近藤剛(編) 現代の死と葬りを考える— 学際的アプローチ— 神戸国際大学経済文化研究所叢書 17 ミネルヴァ書房 pp.206-235.
- 金児暁嗣(1997). 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学— 新曜社
- 加藤廣隆(2017). カウンセリングにおける宗教性—アニミズム的汎神論的宗教性とトポス— 創元社
- Klass,D., Silverman,P., & Nickman,S. (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*. London. Routledge.
- Kubler Ross, E. (1997). *The wheel of life : A Memoir of Living and Dying*. N Y : Scribner.
(上野圭一訳(1998). 人生は廻る輪のように 角川書店)
- 真鍋一史(2009). 「宗教意識」の構造—日本とドイツにおける国際比較— 関西学院大学社会学部紀要, 107, 49-71.
- 森岡清美(1987). 「家」の変遷 日本家族研究・家族療法学会セミナー委員会(編) 「家」と家族療法 金剛出版 pp.54-73.
- 村上興匡(2018). 葬儀研究からみた弔いの意味づけの変化 鈴木岩弓・森謙二(編) 現代日本の葬送と墓制—イエ亡き時代の死者のゆくえ— 吉川弘文館 pp.131-148.
- 奥野雅子(2019). スピリチュアリティにどう向き合うか?—家族療法の視点から— アルテス リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), 104, 13-24.
- 大村哲夫(2016). 東日本大震災の被災地から見る日本人の宗教性—非業の死を遂げた子どもへの慰霊をめぐって— 松島公望・川島大輔ほか(編) 宗教を心理学する—データから見えてくる日本人の宗教性— 誠信書房 pp.20-44.
- 大村哲夫(2017). 宗教から見る現代人と宗教性—非合理の中にある大切なもの— 心理臨床の広場, 9(2), 16-17.
- 大下大圓(2009). そんなふうにお父さんの事を思っていたの—葬式仏教からの脱皮— カール・ベッカー(編著) 山本佳世子(訳) 愛する者の死とどう向き合うか—悲嘆の癒し— 晃洋書房 pp.62-70.
- Palazzoli,M.S., Boscolo,L., Cecchin,G.F., & Prata,G. (1977). Family Rituals A Powerful Tool in Family Therapy. *FAMILY PROCES*, 16(4), 445-53.
- 鈴木岩弓(2018). 死者を忘れない—「死者の記憶」保持のメカニズム— 鈴木岩弓・森謙二(編) 現代日本の葬送と墓制—イエ亡き時代の死者のゆくえ— 吉川弘文館 pp.150-168.
- 高嶋一裕(2014). 都市部における葬儀の今後とは 近藤剛(編) 現代の死と葬りを考える—学際的アプローチ— 神戸国際大学経済文化研究所叢書 17 ミネルヴァ書房 pp.259-279.
- 山本力(2014). 喪失と悲嘆の心理臨床学—様態モデルとモーニングワーク— 誠信書房
- 読売新聞(2008) 年間連続調査・日本人 (6)宗教観 (2018年12月18日取得,
<http://www.rikkyo.ne.jp/web/msato/ReligAnth/Religion of the Japanese2008.pdf>) .
- 遊佐安一郎(1984). 家族療法入門—システムズ・アプローチの理論と実際— 星和書店